

THEORETICAL MONOGRAPH



零式写真芸術論

Zero-Horizon Photographic Art Theory

ZERO-HORIZON / PHOTOGRAPHIC ART THEORY

NAOKI KIMURA

木村尚樹

2026

目次

プロローグ 零の地平	1
写真成立以前を問うための理論的位置	
序章 写真成立の条件へ	3
零式写真芸術論の方法、比較座標、射程	
第一章 零式四相	6
世界側の深層生成モデル	
I 元零 (Proto-zero)	8
II 零振 (Zero-tremor)	10
III 零応 (Zero-response)	12
IV 還零 (Zero-return)	14
V 四相の連関構造.....	16
VI 深層四相から外層構造へ.....	18
第二章 零式外層構造	19
深層生成から外層記述へ	
I 外層の理論的位置.....	20
II 外層三相の論理構造.....	21
III 構造一次相.....	22
IV 構造複合相.....	23
V 構造時間相.....	24
VI 三相は同一外層過程の多次元記述である.....	26
VII 深層四相との関係.....	27
VIII 写真との関係.....	28
IX 外層構造の認識論的位置.....	29
X 外層構造の説明範囲.....	29
第三章 Proto-Qualia	31
世界側外層構造における構造的閾値	
I 概念を導入する理由.....	31
II qualia との区別.....	32
III 構造的閾値.....	32
IV 構造状態としての Proto-Qualia.....	33
V 形成条件上の主体非依存性.....	33
VI 主体側との関係.....	34
VII 認識論的位置と循環論法.....	34
VIII 近接概念との境界.....	35
IX 現象学との境界.....	36
X 写真成立との関係.....	36
XI Proto-Qualia が担う範囲.....	37

目次

第四章 主体の内部変調	38
世界側の構造的閾値と主体側の変化	
I 外部作用と主体側の変化	39
II 内部変調が含むもの	39
III Proto-Qualia との関係	40
IV 前反省的な応答と意識化	41
V オートポイエシスが与えた比較座標	41
VI 構造決定性との比較とその限界	42
VII 内部変調の識別条件	43
VIII 内部変調と写真行為	43
IX 主体側で閉じ、写真機へ渡す	44
第五章 写真機と一回的撮影関係事象	45
写真を有限な痕跡として捉える	
I 写真成立そのものを問う	45
II 一回的撮影関係事象の構造	46
III 写真機の位置	47
IV 世界側条件と有限な条件配置	47
V 痕跡と指標性	48
VI 一回性と数的非同一性	48
VII 一回の撮影と複数の成果物	49
VIII 過去性と撮影事象	50
IX 記録・証拠・社会的使用との距離	50
X 主体関与の時間的分布	51
XI 写真痕跡の定義	51
XII 成立した写真は次の関係へ入る	52
第六章 写真作品と観者	53
成立後の像と鑑賞事象	
I 写真は観者より先に成立している	53
II 感覚は意味形成に先行し得る	54
III 作品条件と観者側情動	54
IV 鑑賞事象における観者の個別性	55
V Barthes の punctum との比較	55
VI 身体・注意・記憶	56
VII 作品の実現形態と提示条件	56
VIII 作者の意図と観者	57
IX Proto-Qualia と鑑賞事象	57
X 鑑賞事象の一回性	58
XI 写真芸術の射程へ	59

目次

第七章 零式写真芸術の射程	60
生成美学と現代画像環境	
I 写真を生成過程から捉える.....	60
II 写真芸術における作者の位置.....	61
III 限界芸術との比較.....	61
IV 写真と生成画像.....	62
V 写真と生成画像の混成.....	62
VI 痕跡の起源と像の真偽.....	63
VII 生成美学の射程.....	64
VIII 理論の説明範囲.....	64
IX 未解決の問題.....	65
X 第七章の結論.....	65
関係補章 零式写真芸術論と写道	67
同根・独立・非混合的連関	
I 同じ実践から異なる問いが分化する.....	68
II 理論体系と実践体系の位置関係.....	68
III 独立体系としての写道.....	69
IV Proto-Qualia と両体系の位置.....	69
V 二体系が併存する位置.....	69
VI 語彙の近接と概念上の位置.....	70
VII 構造確認・作者的定位と写道の境界.....	70
VIII 形成史と理論的妥当性.....	71
IX 二体系の境界関係.....	71
理論補論 零式外層構造の再記述	72
運用概念と構造記述の分離	
I 構造一次相の下位様態.....	72
II 構造複合相の下位様態.....	74
III 構造時間相の下位様態.....	75
IV 三相の重なりと記述精度.....	77
V 世界側記述と成立済み写真の確認.....	78
VI Proto-Qualia との境界.....	79
VII 運用篇との境界.....	80
VIII 記述精度を高めながら本論の境界を保つ.....	80
比較補論 量子的想像力と「成立以前」	81
比喩の有効性と限界	
I 形成史上の接触.....	81
II 近接する問いと異なる対象.....	82
III 可能性・関係・成立という比較語彙.....	82
IV 観測と写真行為.....	83
V 干渉・collapse・decoherence の境界.....	84
VI 「量子的想像力」という限定.....	85
VII 生成画像との境界.....	86
VIII 形成上の刺激と理論的自立.....	87

目次

検証補論 零式が引き受ける問い.....	88
想定される異論と理論上の応答	
I 四相はなぜ四相なのか.....	88
II 「世界側」は不可視の実体を仮定しているのか.....	89
III Proto-Qualia は不要な第三項ではないのか.....	90
IV 写真の「一回性」は自明ではないのか.....	91
V 零式はどの条件で再検討を要するのか.....	92
VI 理論の確定と開放性.....	93
運用篇 零式作品相位プロトコル.....	94
構造確認と作者的定位	
I 成立済みの写真から始める.....	94
II 構造確認の基本語彙.....	95
III 確認は往還して行われる.....	96
IV 構造確認と作者的定位.....	96
V 作品相位と基幹作品相群.....	97
VI Threshold——作品横断軸.....	98
VII Return to ZERO——回帰と再開.....	99
VIII 作品体系の名称区分.....	100
IX 相位変更と履歴.....	101
X 作者による公式定位と第三者の読解.....	101
XI 運用上の境界.....	102
XII 構造確認と作者的定位で閉じる.....	103
終章 写真成立の地平.....	104
零式写真芸術論の成果、射程、限界	
I 成立論としての貢献.....	104
II 一回的撮影関係事象と写真痕跡.....	105
III 成立後に開かれる関係.....	106
IV 理論の射程と境界.....	107
V 理論の限界.....	108
VI 残された問い.....	109
VII 零の地平へ戻る.....	110
エピローグ 還零のかすかな輪郭.....	111
Notes.....	112
Bibliography.....	114
用語表.....	116

プロローグ 零の地平

写真成立以前を問うための理論的位置

写真について論じるとき、多くの場合、そこにはすでに像がある。零式写真芸術論は、成立した像から開かれる解釈や評価に先立ち、その像が成立するまでの条件へ問いを遡らせる。

ここで問われるのは、写真成立へ関与する世界側の差を、像、作者、対象、意味、観者といった成立後の区別に先立って、どのような生成構造として記述できるかという問題である。

本論が用いる「以前」は、時計時間上の先行ではなく、理論上の先行性を指す。撮影の数秒前や知覚処理の数ミリ秒前を測定する時間論ではなく、写真論が説明のために用いる諸区別を、どの地点から前提に置くかという構造上の順位である。

この理論的位置が、**零の地平 (Zero-Horizon)** である。

『零式写真芸術論』と *Zero-Horizon Photographic Art Theory* は、同一の理論体系を指す日本語名と英語名である。英語名に含まれる Zero-Horizon は、その理論的基点である「零の地平」に対応する。日本語の「零式」は、この地平を基点として展開される理論体系の略称として用いる。「零式」は Zero-Horizon の逐語訳ではない。

以下、日本語本文では、理論体系全体を指す場合に「零式写真芸術論」、または文脈に応じて「零式」を用い、理論上の基点概念を指す場合には「零の地平」を用いる。英語表記 *Zero-Horizon* は、英語名称との対応、または「零の地平」との概念対応を明示する必要がある箇所に限って併記する。

零の地平では、世界側の差を対象、意味、表象、感情へ即座に還元せず、まず世界側の生成として記述する。その後、世界側外層構造、主体側内部変調、写真機を含む一回的撮影関係事象、成立後の写真、観者による鑑賞事象へと論を進める。

写真成立は単一原因へ還元せず、世界側深層生成、外層構造、主体側変化、写真機の作動を相互に区別して扱う。

したがって、本論の第一の問いは次のように置かれる。

写真が成立する以前、世界側の差はいかなる生成構造として記述できるか。

第二の問いは、その世界側構造が、主体、写真機、時間的切断を含む撮影事象へどのように関与するかである。

零の地平は、この二つの問いを接続する理論的出発点である。

序章 写真成立の条件へ

零式写真芸術論の方法、比較座標、射程

零式写真芸術論は、写真芸術の成立を、完成した像や意味の分析だけに限定せず、その成立条件まで遡って記述するための理論である。

その形成には、写実実践に加えて、写真論、美学、現象学、オートポイエーシス論、量子論、限界芸術論などとの比較的接触が関与している。

ただし、**概念形成上の参照と、完成した理論命題を支える論証は同一ではない。**

形成史上の参照は、なぜ特定の問いが現れ、どのような概念分節へ向かったかを示す。これに対して理論本文では、概念間の整合性、説明上の必要性、既存理論との比較、適用範囲、限界によって各命題を検討する。本論はこの二つを分離したうえで接続する。

1 写真論の問いをどこへ置くか

写真理論には複数の出発点がある。作者の意図、対象との指示関係、写真機という装置、記録性、複製性、社会制度、記憶、観者経験はいずれも写真を論じるための重要な座標である。

零式が区別するのは、それらの優劣ではなく、**問いが置かれる位置**である。

像と対象との関係を論じるとき、すでに写真像は成立している。作者の表現を論じるときには、作者、対象、選択、像という区別が導入されている。観者経験を論じる場合も、鑑賞対象としての写真がすでに存在する。

零式は、これらの成立済み関係を前提とする議論に、その写真が成立するまでの条件を問う成立論を加える。その最初の記述対象が、世界側の深層生成である。

2 理論モデルとしての零式四相

世界側深層生成は、元零、零振、零応、還零という四相によって分節される。

四相はそれぞれ、均衡、偏位、関係化、再均衡という異なる機能を記述する。

ここでいう四相は、自然科学的な測定単位でも、撮影者の心理分類でも、成立後の作品分類でもない。写真芸術論の内部で、写真成立以前の世界側生成を機能差によって記述するための**分析モデル**である。

零式四相の理論的成立には、各相が異なる説明機能を持ち、相互関係が矛盾なく記述され、後続する外層構造、主体側内部変調、写真成立論との役割分担が

保たれることが求められる。第一章では、この条件を四相の定義と相互関係から示す。

3 形成史上の外部参照

鶴見俊輔の限界芸術論は、芸術制度の成立条件へ問いを戻す視点として、形成史上の比較座標となる。¹ただし、制度以前を扱う限界芸術論と、写真成立以前の世界側構造を扱う零式は対象領域を異にする。両者の関係は理論的同型ではなく、「成立済みの枠組みから問いを遡らせる」という問題設定上の接点に限定される。

オートポイエーシス論は、外部からの作用と内部変化を区別する思考に重要な比較座標を与える。²本論では、撮影主体や「見る」という行為全体を生物学的システムへ同一化せず、第四章で主体側内部変調を考える際に限定して参照する。

量子論は、可能性、関係、成立、観測といった語彙をめぐる比較的思考を刺激した形成史上の参照である。³一方、零式四相と量子現象との一対一対応は理論の科学的基盤を構成しない。量子論との関係は、類比が有効な範囲と破綻する地点を比較補論で検討する。

これらに共通するのは、**形成史上の重要性と論理的基盤を分けること**である。

4 現象学との比較座標

零式が「成立以前」を扱う以上、現象学は重要な比較対象となる。Husserlの志向性や現象構成、Merleau-Pontyの身体的知覚はいずれも、経験がどのように成立するかを考えるための精密な理論座標を与える。⁴

ここで設定する差は、「どちらがより原初的か」という序列ではない。前反省的であっても主体にとっての経験として成立しているものと、主体側経験から区別して世界側生成を扱うモデルとでは、説明対象が異なる。

この比較は、第一章の四相、第三章の Proto-Qualia、第四章の内部変調でそれぞれ具体化する。現象学を理論的基礎として借用するのではなく、世界側と主体側の境界をどこに置くかを検証する比較座標として用いる。

5 写真理論との比較座標

Peirce の index、Barthes の写真と過去の現実との関係、Benjamin の複製技術論、Sontag の写真文化批判は、成立した写真が対象、制度、記憶、社会とどのような関係を持つかを考える重要な座標である。⁵

零式は、これらを置き換えるのではなく、成立論という別の問いを加える。像が何を指示するかに先立って、一回の写真成立事象がどのような世界側条件、主体側変化、写真機の作動、時間的切断から構成されたかを問う。

この比較は第五章以降で論点別に行う。序章では、零式が既存写真論より「根源的」であると序列化するのではなく、異なる問いがどの位置で接続するかを示すにとどめる。

6 理論の射程

零式写真芸術論の主要な適用領域は写真芸術である。

第一章では世界側の深層生成を四相として記述し、第二章では外層構造を三つの記述次元から扱う。第三章では、その外層構造に成立し得る構造的閾値を Proto-Qualia として限定する。第四章では主体側の内部変調を、第五章では世界、主体、写真機、時間的切断が形成する一回的撮影関係事象と有限な痕跡としての写真を論じる。第六章では成立済みの写真と観者との鑑賞事象を扱い、第七章では生成 AI を含む同時代の画像環境との比較を通じて写真の成立起源を再検討する。

この構造から他の芸術領域へ問いが開かれる可能性はあるが、本論が直接論証する対象は写真芸術に置かれる。

主要七章の後には、零式と同じ写真実践の蓄積から分化した写道（Shadō）との関係を、関係補章として扱う。写道は写真実践における主体の構えを扱う別体系であり、零式の内部の主体論とは役割を異にする。両者は形成史上の共通根を持ちながら、それぞれ異なる目的と概念上の位置を持つため、その関係は二体系の境界と隣接として検討される。

その後、理論補論で外層構造の記述を精密化し、比較補論で形成史上の外部参照との境界を確認する。さらに検証補論で理論内部の異論と再検討条件を扱い、運用篇では成立済み作品の構造確認と作者的定位へ移る。

第一章では、まず元零、零振、零応、還零について、定義、必要性、比較座標、相互関係、理論上の限界を検討する。

第一章 零式四相

世界側の深層生成モデル

写真成立以前を単一の「無」や「静止」として表現すると、差の発生、関係化、再均衡という推移を理論的に区別できない。

一方、出発点から対象、情報、意味、目的を置けば、成立後の概念を深層生成へ先取りすることになる。

零式四相は、この二つの問題を回避し、世界側生成を機能差によって分節するために導入される。

元零（Proto-zero）、零振（Zero-tremor）、零応（Zero-response）、還零（Zero-return）は、世界側深層生成の異なる機能局面を記述する。

詳細な定義に入る前に、四相の配置だけを予備的に示す。

- ・**元零**：差が特定の方向へ優勢化していない均衡。
- ・**零振**：その均衡に生じる、方向未確定の偏位。
- ・**零応**：偏位が生成内部で関係を持つ構造差として応答性を帯びる局面。
- ・**還零**：差が一方向へ固定され続けず、中性化を伴う再均衡へ向かう局面。

この配置は、

元零 → 零振 → 零応 → 還零 → 再均衡／新たな偏位可能性

という論理順序を持つ。矢印は測定可能な時間系列や機械的因果系列を示すものではなく、各相の機能上の配置を示す。

以下で後続相の名称を先取りする箇所も、この全体配置に基づく予備参照である。

四相の境界は物理的境界線ではなく、理論上どの機能を記述するかによって設定される概念的境界である。

四相モデルの方法的位置

1 四相モデルの方法的限定

零式四相は、世界側深層生成を記述するための分析モデルである。

その対象は、写真成立に関与し得る世界側生成である。主体の心理状態、観者の感情、作品分類は、後続する別の領域の問題として扱う。

四相には論理的な順序がある。その順序は、元零から零振、零振から零応、零応から還零という機能上の推移を示す。

ここで必要なのは、時間計測ではなく、生成上の差異を分節することである。

また、四相は、後続章で扱う外層構造や作品運用上の語彙とは役割を異にする。

第一章では、世界側深層生成の位相差だけを扱う。

後続概念との役割の差は、それぞれの概念を導入した段階で改めて定義する。

2 四相の認識論的位置

零式四相は、直接観察された対象を記録する分類表ではない。しかし、完全に任意な命名でもない。

四相は、写真成立以前を論じる際に必要となる説明上の差を、概念的に再構成する。各相は独立した説明機能を担い、相互関係を矛盾なく記述しながら、後続する外層構造・主体側内部変調・写真成立論との役割分担を保つ。

この点で四相は、経験科学における直接測定モデルとも、恣意的な象徴体系とも異なり、写真芸術論のなかで成立条件を記述する分析モデルとして位置づく。

3 「推移」という語の意味

本章では四相の間に「推移」という語を用いる。

推移は、物理的対象が一つの容器から別の容器へ移動することを意味しない。

ある生成局面を記述するために必要な機能が変化し、次の記述局面が必要になることを、理論上の推移として明確に示す。

したがって、四相間の境界は測定値によって決まる閾値ではなく、説明機能の変化によって設定される。

ここでいう境界は、後続章で別に定義する構造的閾値や作品上の分類語とは区別される。詳細は各概念の初出箇所を示す。

Notes

以下の注は、外部理論を零式写真芸術論の論理的基盤として置くためではなく、形成史上の参照、比較座標、概念境界、同時代的文脈を追跡可能にするための参照装置である。

1. 鶴見俊輔『限界芸術論』（東京：勁草書房、1967年）。本論では、限界芸術を零式写真芸術論の理論的基礎として扱わず、成立済みの芸術制度からその条件へ問いを遡らせる形成史上の比較座標として限定して参照する。
2. Humberto R. Maturana and Francisco J. Varela, *Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living* (Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1980). 本論では、外部からの作用と作用を受ける側の内部変化を区別する思考を、主体側内部変調の形成史上の比較座標として限定して参照する。オートポイエーシスを写真行為そのものへ同型適用するものではない。
3. 量子論との比較における代表的な歴史的参照として、Niels Bohr, *Atomic Theory and the Description of Nature* (Cambridge: Cambridge University Press, 1934) を置く。本論の四相や写真成立論を Bohr の物理学から導出するものではなく、量子論との接触が形成史上開いた問いと、その比較限界を追跡するための参照である。
4. Edmund Husserl, *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie* (Halle: Max Niemeyer, 1913); Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception* (Paris: Gallimard, 1945). 本論では、志向性・現象構成・身体的知覚を、主体側経験と世界側生成の説明対象を区別するための比較座標として参照する。
5. 写真理論との比較では、C. S. Peirce の index、Roland Barthes の写真と過去の現実との時間関係、Walter Benjamin の複製技術論、Susan Sontag の写真文化批判を、成立済み写真を扱う主要な比較座標として参照する。各論点の参照文献は注 10～13 を参照。
6. David J. Chalmers, “Panpsychism and Panprotopsyism,” in Torin Alter and Yujin Nagasawa, eds., *Consciousness in the Physical World: Perspectives on Russellian Monism* (New York: Oxford University Press, 2015), 246–276. 本論との比較は、panprotopsyism を Proto-Qualia の起源とするためではなく、phenomenal experience に先行する性質をめぐる形而上学的議論との境界を明確にするために行う。
7. Torin Alter and Sam Coleman, “Russellian Physicalism and Protophenomenal Properties,” *Analysis* 80, no. 3 (2020): 409–417, <https://doi.org/10.1093/analys/anaa006>. 同論文が protophenomenal properties を non-structural properties として論じる点は、構造的閾値として定義される本論の Proto-Qualia との相違を示す比較点となる。
8. Marcel Kvassay, “The Meta-Problem and the Transfer of Knowledge between Theories of Consciousness: A Software Engineer’s Take,” arXiv:1903.03418 (2019), <https://arxiv.org/abs/1903.03418>. proto-qualia という文字列の先行使用を確認するための参照であり、本論との概念的同一性や系譜関係を示すものではない。
9. Francisco G. Varela, Humberto R. Maturana, and Ricardo B. Uribe, “Autopoiesis: The Organization of Living Systems, Its Characterization and a Model,” *BioSystems* 5, no. 4 (1974): 187–196, [https://doi.org/10.1016/0303-2647\(74\)90031-8](https://doi.org/10.1016/0303-2647(74)90031-8); Humberto R. Maturana,

“The Organization of the Living: A Theory of the Living Organization,” *International Journal of Man-Machine Studies* 7, no. 3 (1975): 313–332,

[https://doi.org/10.1016/S0020-7373\(75\)80015-0](https://doi.org/10.1016/S0020-7373(75)80015-0). 本論では、自己産出や構造決定性を写真実践の理論へ移植せず、外部作用と主体側変化の関係を考える限定的な比較に用いる。

10. Charles Sanders Peirce, *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, vol. 2, *Elements of Logic*, ed. Charles Hartshorne and Paul Weiss (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1932), CP 2.281. 写真を対象との実在的・物理的結びつきを持つ index の例として扱う議論を参照する。本論では、指標性と、一回的撮影関係事象を起源とする写真痕跡の定義を区別する。
11. Walter Benjamin, “The Work of Art in the Age of Mechanical Reproduction,” in *Illuminations*, ed. Hannah Arendt, trans. Harry Zohn (New York: Schocken Books, 1968), 217–251. 本論では複製可能性と真正性をめぐる議論を、撮影事象の一回性と複製可能な実現形態を区別する比較座標として用いる。
12. Roland Barthes, *Camera Lucida: Reflections on Photography*, trans. Richard Howard (New York: Hill and Wang, 1981). 第五章では写真と過去の現実との時間的非対称性、第六章では punctum を観者固有の作用点に関する比較座標として限定参照する。
13. Susan Sontag, *On Photography* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1977). 写真が知識、証拠、所有、経験、消費などの社会的・文化的実践へ関与する問題を、写真成立後の使用・解釈を扱う比較座標として参照する。
14. 同時代の写真・生成画像環境については、*Aperture*, no. 257, *Image Worlds to Come: Photography & AI* (Winter 2025; published December 1, 2024); Rob Horning, “What Is Realism in the Age of AI?,” *Aperture*, January 31, 2025; *Foam Magazine*, no. 66, *MISSING MIRROR – Photography Through the Lens of AI* (2024) を参照する。これらは第七章の同時代的文脈を確認する資料であり、零式写真芸術論の理論的基盤ではない。

Bibliography

本 Bibliography は、零式写真芸術論の「一次的理論基盤」を列挙するものではない。本文で実際に機能している形成史上の参照、比較・概念境界、同時代的文脈を、役割別に整理する。

A 理論形成・理論参照文献

- ・鶴見俊輔. 『限界芸術論』. 東京：勁草書房, 1967 年.
- ・Maturana, Humberto R., and Francisco J. Varela. *Autopoiesis and Cognition: The Realization of the Living*. Boston Studies in the Philosophy and History of Science, vol. 42. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company, 1980.
- ・Varela, Francisco G., Humberto R. Maturana, and Ricardo B. Uribe. “Autopoiesis: The Organization of Living Systems, Its Characterization and a Model.” *BioSystems* 5, no. 4 (1974): 187–196.
[https://doi.org/10.1016/0303-2647\(74\)90031-8](https://doi.org/10.1016/0303-2647(74)90031-8).
- ・Maturana, Humberto R. “The Organization of the Living: A Theory of the Living Organization.” *International Journal of Man-Machine Studies* 7, no. 3 (1975): 313–332.
[https://doi.org/10.1016/S0020-7373\(75\)80015-0](https://doi.org/10.1016/S0020-7373(75)80015-0).

B 比較・概念境界参照文献

- ・Husserl, Edmund. *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie. Erstes Buch: Allgemeine Einführung in die reine Phänomenologie*. Halle: Max Niemeyer, 1913.
- ・Merleau-Ponty, Maurice. *Phénoménologie de la perception*. Paris: Gallimard, 1945.
- ・Bohr, Niels. *Atomic Theory and the Description of Nature*. Cambridge: Cambridge University Press, 1934.
- ・Chalmers, David J. “Panpsychism and Panprotopsychism.” In *Consciousness in the Physical World: Perspectives on Russellian Monism*, edited by Torin Alter and Yujin Nagasawa, 246–276. New York: Oxford University Press, 2015.

零式写真芸術論

Zero-Horizon Photographic Art Theory

著者 木村尚樹

2026

© 2026 Naoki Kimura. All rights reserved.